

令和3年度 ▶あまのくらし部会 実施報告

あまのくらし部会の役割

障害のある人の地域生活を支援するための課題等について協議します

あまのくらし部会では、災害時にも生きる地域のネットワークづくり、親の高齢化に伴う障害のある人の自立生活や相談支援体制の整備などについて取り組んでいます

令和3年度の取り組み

障害の有無に関わらず、誰もが楽しめるように工夫がされているバリアフリー映画を上映し、相互理解を深めるために障害者と健常者がともに鑑賞した

部会の開催と協議内容

前半：第1回～第2回

- 令和3年度 部会長：高尾 副部会長：川村、加藤
 - 新型コロナウイルス感染症のことや情報保障についてなど、意見交換
 - 避難所シミュレーションについて
 - バリアフリー映画会について
- キャラバン事業（無料で映画を借りられる）の情報提供

後半：第3回～第4回

- キャラバン事業を利用して、バリアフリー映画上映に向けて準備をした

あまのくらし部会フォーラム

「インディペンデントリビング」 上映会

バリアフリー映画の上映と

映画出演者によるトークショー

- ・新型コロナウイルス感染拡大の中、トークショーが録画となる
- ・また、会場に来たくても来れない方へ、急遽Web配信を決めて実施

① 映画の内容が非常に興味深かった

障害当事者が運営する、障害者の一人暮らしを支援している大阪の自立生活センターを舞台に、日常の介護の様子や介護者と当事者の交流、それぞれの障害当事者や家族の想いや一人暮らしに至る経過などを語る

当事者の想いを追求する中で、介護者も当事者も変わっていく様子等も描かれている

② トークショーがさらに興味深かった

映画に出演しておられる障害者であり、大阪の自立生活センターをそれぞれ運営しておられるお二人に対談形式で語っていただいた。

出演者の方が、交通事故で障害を負って、実家にいた時と一人暮らしをしている今の考え方の変化などについて語っておられた

印象的だったのは、「死ぬときに、次に生まれる時も脊髄損傷でもいいと思える人生」と言われていたこと

部会での振り返りやアンケートから

- ▶ 当事者が生き生きと活動していて驚いた
- ▶ パッションを感じた、前向きな生き方に感動した
- ▶ 障害者が支援者になり、地域を変えていくのが大変感動した
- ▶ 障害があっても周りに支えてもらえることで自立もできるんだ
- ▶ 障害者の暮らしを我が事として考えてくれる人が1人でも多く増えてくれたらと思う
- ▶ 当事者が中心になって行う支援は、寄り添い方が違い、その力は凄いと感じた

- ▶ 障害者だけでなく、介護の必要な方々の尊厳ある生き方、寄り添う支援の在り方を考えた
- ▶ 親は先回りして色々決めてしまうことが多い、本人の自己決定を優先にすることを考えた
- ▶ 尼崎にもこんなところ（自立生活センター）があったらいいなと思った
- ▶ 一人暮らしが強調されて、施設暮らしはよくないようにみえた
- ▶ 夢みたくて、現実とのギャップは大きいと思った
- ▶ コロナ禍でも、会場へでかけることができてよかった
- ▶ 作業所で（自宅で）見られてよかった

令和4年度に向けて

- ▶ フォーラムや映画の実施を続けていき、同時に当事者の話を聞く場をもち、地区ごとの集まりを設けディスカッションを実施したい
- ▶ 今年度に予定していたが取り組めなかった避難所シミュレーションを実施して、各障害種別に合った防災を考えたい
- ▶ あまのくらし部会にとどまらず、他部会ともコラボレーションできる事業の展開をしたい
- ▶ 部会の開催は2ヶ月に1回が適当